

20190908「安心しなさい。わたしだ。」マルコ 6 : 45-52

「安心しなさい。わたしだ。」 マルコによる福音書 6 章 : 45 - 52 節

森島 牧人牧師

5つのパンと2匹の魚で5千人を遥かに超える人々を満腹にされた主イエスは、その食事が終わるや否や「弟子たちを強いて舟に乗せ、向こう岸のベトサイダへ先に行かせ、その間に御自分は群衆を解散させられた。」(マルコ6 : 45)と聖書にあります。群衆はもちろん弟子たちをも急いで遠ざけようとする主イエスのこの行動は、私たちに奇異な印象を与えますが、それには2つの理由がありました。

その1つは、主イエスに対する弟子たちや人々の誤解にありました。パンと魚の奇跡を目の当たりにした人々は、この人こそ自分たちの国を立ち上げてくれる王・メシアではないかと考えたのです。主イエスの教えを理解せず、政治家としてのメシアを期待して興奮冷めやらぬ人々、弟子たちの理解も乏しいものでした。思いの全く異なる人々を遠ざける、これが理由の1つだったのです。理由の2つめは、寂しい場所で神に祈りたいと思われてのことでした。人々を解散させ、弟子たちを遠ざけてひたすら主イエスが求められたのは、一人になって神と向き合い、神と対話されることでした。

この時、人々と離れて一人になることを望まれた主イエスの在り方を通して、私たちは私たちの「救い」を見るのが出来ます。捕えられ、神と切り離された十字架上の主イエス。一人になられた主イエスが十字架の上から覗き込んでおられたのは、人間の罪の深淵でした。私たちの救いは、孤独の中にあつた主イエスによつてもたらされたのです。一人になること、それは私たちには心細く不安なことです。しかし救いとは、私たちが一人で、自立した個人として神の前に立つことです。教会の原型は、自立した一人一人が連帯して行くところにあります。この時大切なのは横ではなく垂直の関係、すなわち神との関係です。神と繋がっている一人一人が連携して働く、それが教会なのです。

さて、主イエスに強引に舟に乗せられ、訳の分からないまま湖の真ん中あたりへ差し掛かった弟子たちを、逆風が襲います。聖書には「逆風のために弟子たちが漕ぎ悩んでいるのを見て、夜が明けるころ、湖の上を歩いて弟子たちのところに行き、そばを通り過ぎようとした。」(同6 : 48)とあります。「通り過ぎる」は旧約によく出て来ますが、見離すことではなく傍にいるという意味です。湖上を歩まれる主イエスを見て悲鳴を上げる弟子たち。主に捨てられたのではという不安の中にあつた彼らは、その人をキリストと信ずることが出来ませんでした。主が彼らから決して目を離さず、遠くから見ておられたことを知らなかったからです。怯える弟子たちに近づいて「安心しなさい。わたしだ。」と言われる主イエス。この大きな喜びの場面を、聖書記者は「イエスが舟に乗り込まれると、風は静まり、弟子たちは心の中で非常に驚いた。パンの出来事を理解せず、心が鈍くなっていたからである。」(同6 : 51 - 52)と記しています。

苦難の中にあつた初代教会を励まし続けたであろうこの出来事を通して私たちが知らされるのは、キリストが近くにおられることに気付かない心の鈍い弟子たちとは、私たち自身であるということです。日々の生活の中を逆風が襲う時、「安心しなさい。わたしだ」と言われる主の声を聞く者である幸いを感謝しながら、歩んで行きたいと思えます。